



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

卷之三

卷之三

諸侯の神官称呼之ノ 東邊に於社日而後紀之四年
神官社ノ 通引其而後將至中長者宜

諸君よ神官称呼之ト モ禮に於社日以後紀入内二年
神官社ノ事也
の所下曰神長中年通例其有官符行神長者宜
改為神主ヤツモシ いよりそひハ神長ヨ呼トと却して神主ニ稱と
させりと又ノナリ伊勢の一称主と長官と呼モ有ヒ神主
のも有リトシ也
社長官次官ハカミストとつは一称主をかこの主として神官
と称すレ故



牛頭天王の梵語 密宗の梵文 をすましく教へ者 アラニヤ 瞿摩揭闍婆那提
波囉惹瞿摩 アラニヤ ハ牛揭唎耶 アリヤ ハ頸提婆那天囉惹ハ三の梵語

或問我國溫泉涌出代代此神と祀りてはと厥是邦少もアハシヤと
曰ニ秦記云驪山溫湯曰說 ス 三性祭乃得之 タマニ

富家入道殿に後賴能はし カミノ 日後ノ儀偶 テラハ ト
て匪はすまつを事すかを教よキツテセヌカハナキガヨ
ミケル教ヲルヤ思トアリトカアリナラセウトヒトヒ
通ひテ カミノ 後賴能アリトモセウトヒトヒトヒ
ウヘリテ カミノ 永能清ムヒタミト被空テ カミノ 見覺法師
ヨリヨリアヒテ カミノ 独孤尊ナツモ妙無能

と云ふと云ふ事とてアリニモテアシキ カミノ 何アリ
すす人トウソウヒキ カミノ 入内ルモトシキヤク カミノ 萬人れ
キニセスリテ育目ヨリニ責ムニモセゾヘニワツリモカ
トモ長ニ云萬人

後賴能の教ハ人ナホレ カミノ 永能八百御ハ自御ハ教能ハ帝内支能
ムニモキナムニモセウトヒキツト人トナリハメテ御正
自アリリトヒヤ

。或問銀鈔も カミノ 銀鈔對馬を役と爲て九郡ヨク カミノ 九郡代剥羅
ムニモ日向は取ツシヤシズカト人トナリハメテ御正
平向人ヨキシハ其列の海中桔櫻 カミノ ハトモアキ年韓代モ

いよき事あらむとてひづりを度す行うとておつまむ
やうすあり玉人御るありとてにあをひ轉ばうんす
とえうそとふそく轉ぼう日ゆの方に夙通しゆふや
。日ゆ四字ちの黒毛うがやれ可也の尊海波のあくや度す
すりよとれしきもとてソシヤの入ルニキルナキキナタ写る
上空一枚ヨリ五井のめー寫中ノ羽とまつりゆふ
猪子ひたうモ多色のぐくに意宮穴えぬるに定所うと
れん馬くゆかうてぬすびと刃ノ頭さうの闇魔打列
と一もすてそりよひづのふと峰一神代のちき事跡
。今大清康熙辛亥年也帝去一壬辰令下一年歿す
ま

者の年貢其半と減せり是立後の承きを後せしゆうとくや
。和正元年の役ありて尊卑役あり、男邦也亦年忌の役ありて
是拘也。致國^{メニニ}男邦^{七歳十六歳二十四歳半三歳}馬年^{二十歳廿二歳}六十一歳^{馬年}而され
曾^ハ忌雙女ハ忌隻ともす陳儒君羊碎^ハ詠^{ムス}て小齋^ハ
李渾^ク方^ハ詩^ハ寫^ハて入^ハと乳^ハに象^ハ人^ハ偶^ハ年^ハ孫^ハと^ハ詩^ハ
すじ生^ハあれハ子^ハ莫^ハ久^ハと足^ハ冠^ハ并^ハ老^ハ也^ハ男^ハ偶^ハ
と忌^ハ辛^ハ年^ハ忌^ハしても^ハ禍^ハ禍^ハ人^ハあ^ハ傷^ハよ^ハひてから
な^ハと^ハ死^ハと^ハせ^ハや^ハ嗚^ハ呼^ハ惑^ハ哉^ハそ^ハ人^ハ
。汝瑞性^ハ當^ハと南^ハ制^ハ也^ハ與^ハ福^ハ也^ハ誰^ハ靡^ハ幸^ハ古^ハ汝^ハ場^ハと直^ハれ^ハ道
仰^ハ小^ハ水^ハのあ^ハと^ハ退^ハと^ハう^ハシ^ハて^ハ黑^ハ豆^ハ穀^ハと^ハ今^ハ取^ハま

近傍は嘗てのりあつてやだ後は狼食と多食すへども
とえて惟舉子の父誠は煮食へハ触小みと載と記せりそ
も亦坐と立車と將りてあり

○狗兒胎婦人懷孕一て経り行事常時ゆきと云う一キミ
翁タ本云集よアモ時後の若はシ所盛胎始胎ハ古ニテ
有ヨモセモ後ヨテ畜モ胎モ有リ

○觕不觕論に嘉靖年中に翰林二人の肩輿に乘て即ち被重
トセ萬曆ヨリて人の肩輿ニ乗リ政と元代郭つと有リ
トシ者ナリトソラ今ナホの人肩輿と称して輜輶に乘三十
年前ナ希ナシ庸駕也三四人の肩又と用て駕を走らリ

もと京と廻風俗の鳴峰

○肥前四角切毛根里ヨリとと所あつひ地より育ハ先ナ
トシく毛根地トヤレテアリトウニ墨活波ヨ高め八室乃組九列
玉立ヒ日出村の川よ大地にて人とあくタシ一為於後う大矢
を以て彼地を射毛根ナカニ多也と財の川上の射地也アリ
柳ヨリ一地ハ川底ナシ草と育有アリ一力を下すて多々充
蛇よ絶とほけて川あけドリ後モヨモヒ里の育人ハ一
刀を常とソテニ年年か放けたる橋一枚おまへにモ年半に
之のうちモヨモヒの根あんま一方八卒リモウモ
カシニテノ木草ともうて又ノ神人作ヘトムサ

先と極に附さぬられりと云ふ事一々これより一と
て初よりとくとくを附足ししと爲のノ如也セ一ノ後テ

茶人宗臣

珠光子

珠光子

南都衆徒

大林子

古庭子

宗易子

治名子

利休子

治名子

珠光

宗珠

宗悟

紹鷗

或地酒家子

仲村

宗易

治名子

利休

宗屋

古田織部

重勝

江月子

宗甫

山城守

政一

宗和

金森忠雲子傳

織部子

宗屋左近

細川三翁傳

多賀左近

東山子

斤桐石見守

遠州子

舟越伊豫守

伊豫子

一尾伊織

利休——道安——千宗仇

記列家代有之

左年記曰嘗法ハ四品以下平侍武士十シトハ閑枝折又ノ晉爵家
ニクニ居ヌ丁ニテコソゾアルニミ

故スルニ當時諸大夫トイヘ凡武士の家皆板蕪町前後無法壯觀ツ
還フスルヲ榮トス嗚呼

○西山善峯寺證空善惠源空上人土御門贈從一位前内大臣源通親

久我

七男

之日加賀權守親李子

ト

栗生光明寺蓮生

信房

實

祖

七男

之日加賀權守親李子

ト

栗生光明寺蓮生

信房

實

栗田園白道兼孫

右少將兼房四男

之子

栗生光明寺蓮生

信房

實

宇都宮座主宗圓

栗田園白道兼孫

之子

栗生光明寺蓮生

信房

實

原養子仕外記後般本姓其子宇都宮朝綱

左少尉

其子成綱

始依朝政事

配流土佐國出家入源空之門即蓮

生是也其子修理亮下野国秦綱

母平時政女十

二勇石見守宗綱皆子

孫多シ矣女子二人嫁内大臣通成一嫁權大納言為家

伊勢国司

公官左大河内北島一族相替居之行司務

北島權大納言顯能親房權

從三佐頭雖弓大河内滿雅二男也有子孫

北島權大納言顯能親房權

大納言顯泰左中將滿雅權大納言教具右中將政卿權大納言

村親參議左中將晴昊左中將具教

信長公
殺之
信雄
以讓司故号北畠殿

○龜岩龜泉トニ書京師相國寺の事よりある宣府將軍の
實績と件禄を足利家與慶の少説文の解説、高麗の邊境より
弓と弓矢謬誤も又くより近年杜撰のれよれす

よき部とハ鷹と之の称峰波氏城山海に及ぶる
波氏城山海に及ぶる
波氏城山海に及ぶる
波氏城山海に及ぶる、置放二ノヨシタチ
二ノヨシタチ、達アリタチと有アリタチの者と云アリタチ也と刀舟と呼フ

○ラテラミと内海とすかよのはひ波多院内海爾黒部のすが
裏海とすも海防幕室要事えくすく洋裏海と
相接いセキコヌラウちの称め持すり万葉集の防人郭領セキモリコトリと
ソバアムラモト一お構くのをすゆ解ニ又クセキコヌ

ラトツハモヨリ也トクルトモラ

○車の大八葉ハヤハヤとソハ、ハヤハヤの紋様もすく起る年
に宮内小物章綱御車サ一車鑄先一毫官庫より又と考
スルハ革とはハヤハヤ青蓮院の八葉と描ぬるの車と、先とね
サクナゼ一ねや九條御石經教との車鑄様一毛ハヤハヤこれハ九
曜とサクモハヤハヤ又龜甲の紋ハヤハヤと有る蟹甲紋ハヤハヤ
父翁す

○同二幅對の終より一月良と後易衣と朝陽と云々一月下詔
諭の事と登てれと對月と云々あり、詔所と云ふと云す
と云平曰これ詔所に名ふ如すちの句仙と是を(の)如

五の歌や」とえに印其句

朝陽補破衲

對月了殘經

この御湯對月の事と子元修の名を傳すされハア。又
と争へずしてあつて汝河をとめ、鷺を竹籠舟より
乃而ナリテ、又

宝永新内裡殿中益圖

筆者

紫宸殿

聖賢圖

北方御
張午

東仲山甫 大公望傳說 伊尹 薦何子產

柱

鄧禹。管仲。第五倫。張良。蘧伯玉。諸葛亮

柱

柱

魏徵

杜如晦。房玄齡。馬周。李鄆。虞世南

柱

杜預。張華。羊祜。楊確。陳寔。班固

柱

桓榮。鄭玄。蔣武。倪寬。董仲舒。大翁。賈誼。叔孫通

西京銘書。根政殿御筆。近衛縕。法眼養朴。同林散書

中央。蓬萊同下。獅子三松。參天。松柏。宋碑。照香

清涼殿

公卿人間

四十

想今虎。海北友行

諸大夫間

夢令松鶯荷葉之仙

同次人間

夢令楊柳子雲漢風能

御帳人間

夢令孔雀狩獵永叔

御上段

曲水

永叔

中段

鶯

鶯同

探信

下段同

狩獵

春

御後人間

夢令琴瑟書盈

永叔

鬼人間

六

永真

御手水間

三

舞

朝飴

向

之

仙

其盤所

九

柳

右夢令花鳥

議定所

二

夢令

九老

柳

東廂

南端翼角

間半

杉戶

二枚折

南

義

許由

永真

同折廻

四

方間半

杉戶

二枚折

東

牡丹

永叔

同折廻

西

方間半

杉戶

二枚折

西

白鶲

永真

上段良角

麻

間半

杉戶

二枚折

東

金鷄

永真

同良角

半

杉戶

二枚折

南

菊

探信

清涼殿

外

樣

少

廊下取佳

間

杉戶

一枚折

北

四種

探信

小御所

同人

御上段

東

方間半

杉戶

一枚折

東

金鷄

永真

中段

東

方間半

杉戶

一枚折

東

牡丹

永叔

下段

東

方間半

杉戶

一枚折

東

牡丹

永叔

御上段

西

方間半

杉戶

一枚折

西

白鶲

永真

御上段

西

方間半

杉戶

一枚折

西

王水君

永真

同人

南ノ方取付廊下ノ間

二十
雲篠砂子

如川

南廂西ノ方一間半杉戸二枚折

東八松鷺
西八桃源圖

洞春

同東ノ方一間半戸二枚折

東八布引滻
西八竹三虎

北廂中央ノ一间半杉戸二枚折

東八海棠葉鳥
西八芙蓉非翠華

同廂ヨリ西折廻杉戸二枚折

東八竹林七賢
西八高山四體

同廂ヨリ西ノ方行當杉戸二枚折

東八四皓右ノアソ
西八三笑

探信

西廂ヨリ西ノ方廊下杉戸二枚折

東八七賢右ノアソ
西八三笑

同人

同取付廊下ヨリ御學問所出一間半所杉戸

南北飯古來右アソ
南北三笑

御學問所

御上段

雲薄砂子
雲梁園賦圖

中段

雲薄砂子
月庚亮樓因

下段

雲薄砂子
桃花春夜宴圖

右各十二丈門間也

法橋探山

西ノ方一ノ間

雲薄砂子
菊種

柳雪 二ノ間

雲薄砂子
流山吹

狩野経衡

三ノ間

雲薄砂子
芳三庭

海北友竹

東廂行當ウノ間杉戸

南八毒玉
南北張寒

鶴次探山

北ノ廂東行當ノ間

東八櫻野鶴
西八白梅

同人

同行當ノ間杉戸

東八蓮童
西八鳴渡鷗

成林二十柳雪

常寧ノ殿

左の御殿ナリ
東八車胤

常寧ノ殿

御上段

左の御殿ナリ
東八車胤

中段

右御人

洞春

劍全ノ間

十五

同御置所

御床ノ内所

十六

八枚

夢令

紅萼 雪鷹砂子

四季花

トサ

夜ノ御殿

十六

雲鷹砂子

古野山

承叔

中ノ間中段

雲鷹砂子
立田川

如川

御柄之字海八枚扇

承叔

同下段

雲鷹砂子
葛吉景

洞春

十六枚
下十八枚
琴唇書面
圓流

探信

北ノ方東一ノ間

十五

沙子泥引

春日野行章体

探雪

同二ノ間

十五

沙子泥引

赤井川道庭三般

洞春

同三ノ間

十五

沙子泥引

四时吉山火

洞春

同四ノ間

十五

沙子泥引

松修の景

探信

同五ノ間

十五

沙子泥引

赤井川道庭三般

洞春

上段南廂翼ノ角

一間半松戸

東ハ東坡
西ハ山谷

洞春

東行當一間松戸

東林和靖
西象

西廂南端一間半松戸

南象
北广

洞春

西廂中央一間半松戸

南根猿
北漢夫人

同人

洞春

同北行當一間半松戸

南ハ刀根
北ハ竹

探信

北廂中央一間半松戸

東ハ獅子
西ハ猿子

洞春

御小座敷

御承別

沙子泥引
宮詞銀燭秋光

養朴

二ノ間

沙子泥引
楓橋夜泊

同人

洞春

東廂北行當一間半松戸

南ハ王覽
北ハ雪玉母

探信

同南行當松戸

南ハ楊柳
北ハ滝兄
李青白

洞春

御三ノ間 常光御所の多之 上段 中段 下段 各 二間

右 土佐松監

東廂ノ行當リ杉戸

東ハ山三字
和ハ居る

南廂西のり南リ杉戸

東ハ梅松
和ハ花菱

西廂トカリ南リ杉戸

西ハ難韁人
和ハウラニス

御畠ノ間御令ミ松竹

文仙
柳白

記録所 東二ノ間八尋

所記二ノ間八尋

宮内

右致

御辨道廊下記録所北之間杉戸

東戴安通
西夏の机

洞春

御湯殿御上段

東ハ雲砂子
和ハ耕化

洞春

棖政休息所 南一ノ間 兼二ノ間

東ハ雲砂子
和ハ萬葉音

洞春

御辨道廊下休所巽角一ノ間杉戸

東ハ養由
西ハ張良策石

洞春

御糸ノ間御車寄

上段

東ハ雲砂子
和ハ萬葉音

擇信 中段

東ハ雲砂子
和ハ牡丹

洞春

東下段

東ハ雲砂子
和ハ耕化

日人

上段東ノ廂北行當リ杉戸

東ハ布津はつすみ
和ハ子のひ

柳雪

北廂南ノ方杉戸

東ハヨハシ
和ハ白うさぎ

柳雪

二筋廊下北ノ口杉戸

東ハヨハシ
和ハ白うさぎ

柳雪

同前 南口杉戸

東ハヨハシ
和ハ桔木・鶴昌鳩

柳雪

而ノ縁ヶ南ノ杉戸

東ハ布袋唐子
和ハ柏

柳雪

玉川元春

門所北，杉戶

南少郎白
少管取鷺

河急源

御奏者所御車寄

官女遊

行山尚景

曰所東，間

蓮海棠

少村村環

東對屋東，杉戶

漢夫人
孩少郎

重物

東上段，以毛物

曰人

化粧，間

桃少郎

軍中八全活

二上段，以毛物

傷修御布

化粧，間

桃少郎

重物

三上段，以毛物

永是形母

化粧，間

桃少郎

軍中八全活

四上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

五上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

六上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

七上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

八上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

九上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

十上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

十一上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

十二上段，以毛物

無修御布

化粧，間

桃少郎

重物

三ノ上段 日

主承承行

化猿ノ間

上多木也

四ノ上段 日

足経紫

化猿ノ間

主多木也

五ノ上段 日

松葉風

化猿ノ間

足経風

車ノ端松戸

西利劍

松葉楊眉

小火事福

足経

清原殿方

清車都小ノ打巴

小火事福

足経

日所之卿ノ間

出ル所ノ松戸

東火事方福

足経

紫震殿方内ノ番所

火事も

足経

刀初尾ヨリ

南座紫車ノ方

火事も

足経

内所攻ノ間

火事も

足経

足経

内侍所東口合廊下ノ間

火事も

足経

清涼殿外櫻萬所

東ノ向

柳伯

西ノ間

青柳

御承ノ向

柳伯

門裏

紫震殿方内ノ番所

柳伯

南ノ向

移地揮腕

日御幸道廊下ヘ出ル

松戸

南ハ張哥

右八宝永六年成就十二月十六日遷幸

○藤氏南家ノ祖正一位武智磨

贈大政大臣

北御幸天祐國宇智郡宇野村

永正寺

洛東泉涌寺

後山巖寺

古松

後ノ阿陀峯トヤマモ奈物の花

タリとア波東ハ壺坂の方面四里半 五郎川の小傍ニシテ海の毛
牛一頭と通せん毛糸の毛牽てあれハめ伏して阿ムナムチアヤ
アモ武智磐坂ノ郭とアキラ赤岸はづもくつるハラカトミの後アシテ海之上に布見
を描クシテウ

○病の梅あるとハ一小のやうより三病の枝の多ナ峰河也
うぬんで小の方より梅あるの根元を被れめりひし檜也高木也
高木被れめりおとて傍壁庵也

○長者年荒廢の時は荒涼也之主西京金縫也モトミヒタチモ波氣今又
○道の草危ち千般と道の草とアハサギ等ち製一朝也桂白
ナリてあらわしぬあとぞす今も頗爾とア節よまセニテ瓦臺

竹林 ちくじゆ

○同壺坂の山腰半山面可也ノヨ深松原松木森也の邊臺も
え寂年中寂寞也此ニ而後坂西一派の事多シ被後と勘候キ
セキツの御無事もと以建焉ニテ有之也と易モセニテ
皆の後山も 被後山也號スニテや壺坂ハ被後也下多モ井筒石
玉モ佛龕と多那一仰もち代の事の如き

○山崎西紀伊野井也の里の坂よやまく御く跡也井町の
やまくの里ありともあゆく下瀧屋前と云ふ字も櫛向
アモトクシテアモトキモトノアシ

○物も主とキスモテ度空半と葉レヒトス都とバクラワトモ

是の事と訛譲りてサリシナコラニ又馬王老ナリテ御子に馬
子連トシム也アリ平飼相^{ハク}トヨ御^{ハシ}テオミ^{モミヤウチ}而行^{ハシ}の後高^{タカ}セ
高^{タカ}は廄馬の事と云せアリ此^{ハシ}ノ节^{ハシ}錫^{シケ}ヒテ御用馬の事と考^{スル}
トシ^{ハシ}後^{ハシ}御象^{マタマシ}の事^{ハシ}シテ^{ハシ}馬^{ハシ}ニ連^{ハシ}トシ^{ハシ}後^{ハシ}バツレ^{ハシ}トシ^{ハシ}
トシ^{ハシ}後^{ハシ}バツラ^{ハシ}トシ^{ハシ}呼^{ハシ}トシ^{ハシ}也^{ハシ}首葉^{ハシ}源^{ハシ}の事^{ハシ}アリ^{ハシ}トシ^{ハシ}
ヤソシ^{ハシ}トシ^{ハシ}毛色^{ハシ}也^{ハシ}ヤソシ^{ハシ}トシ^{ハシ}と云^スと^{ハシ}等^{ハシ}シモ^{ハシ}及^{ハシ}
○^{ハシ}後^{ハシ}鹿^{ハシ}トシ^{ハシ}毛^{ハシ}と^{ハシ}少^{ハシ}シ^{ハシ}ト^{ハシ}少^{ハシ}シ^{ハシ}ト^{ハシ}不^{ハシ}
終^{ハシ}不^{ハシ}無^{ハシ}鹿^{ハシ}の牡^{ハシ}と鹿^{ハシ}と云^ス牡^{ハシ}と鹿^{ハシ}と云^スハシ^{ハシ}ト^{ハシ}サ^{ハシ}キ^{ハシ}モ^{ハシ}也^{ハシ}
○^{ハシ}鷹田^{ハシ}人官^{ハシ}等^{ハシ}

神主外正八位下祝部官^{ホリヘノ}宮^{カミ}鹿^{カミ}ト^{ハシ}

右職位姓^{ハシ}名^{ハシ}と別^{ハシ}て^{ハシ}は

神主^職也^{ハシ}外正八位下^位祝^姓部^官宮^{カミ}鹿^{カミ}名^{ハシ}也

祝部^{ハシ}姓^{ハシ}氏^{ハシ}錄^{ハシ}建^{ハシ}角^{ハシ}身^{ハシ}余^{ハシ}之後^{ハシ}也^{ハシ}當時^{ハシ}祝^{ハシ}部^{ハシ}氏^{ハシ}等^{ハシ}

樂^{ハシ}肉^{ハシ}の^{ハシ}神^{ハシ}も^{ハシ}御^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}

祝部^{ハシ}類^{ハシ}巫^{ハシ}部^{ハシ}

宮^{ハシ}部^{ハシ}工^{ハシ}部^{ハシ}等^{ハシ}の^{ハシ}神^{ハシ}也^{ハシ}皆^{ハシ}其^{ハシ}所^{ハシ}也^{ハシ}朝臣^{ハシ}真^{ハシ}

人の^{ハシ}や^{ハシ}樂^{ハシ}肉^{ハシ}の^{ハシ}神^{ハシ}也^{ハシ}御^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}
役^{ハシ}を^{ハシ}也^{ハシ}樂^{ハシ}肉^{ハシ}の^{ハシ}神^{ハシ}也^{ハシ}ち^{ハシ}役^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}
ミ^{ハシ}は^{ハシ}御^{ハシ}饗^{ハシ}の^{ハシ}神^{ハシ}也^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}
姓^{ハシ}の^{ハシ}役^{ハシ}を^{ハシ}役^{ハシ}也^{ハシ}阿^{ハシ}利^{ハシ}と^{ハシ}性^{ハシ}と^{ハシ}屬^{ハシ}也^{ハシ}之^{ハシ}呼^{ハシ}神^{ハシ}
姓^{ハシ}の^{ハシ}役^{ハシ}を^{ハシ}役^{ハシ}也^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}ト^{ハシ}ア^{ハシ}

昌泰三年四月の官^{ハシ}等^{ハシ}に樂^{ハシ}肉^{ハシ}役^{ハシ}荒田^{ハシ}井高^{ハシ}と^{ハシ}い官^{ハシ}

封家綱丁の字あり ブケモワテラト後

翁我官
祝詞也

。物内官の神入彦臣氏、室司神も役所為廢後等節より例
ありて神子守教氏、大内人而事内シテの臣、御頭ミサキ今卿ミサキを又
別為荒内事人シテ檢校等より御せ。其化石系被教主役所玉
衡の官へす。祠官又稱シテ御多々。大のことを役所臣民と津
波シマと稱シテ。己巳役所と呼シマ。尔方聲中病と云ふ。又い稀ハズる
致シマ。由シマ神人シマ、檢校の御シマ。淨御シマ從シマ御シマ。其衣シマと云シマ。年漫
に之役の布シマ。又シマ海衣シマ。御シマ從シマ御シマ。其衣シマと云シマ。下年神
官より。上序シマ。又シマ御シマ。

鹽田鳥居神シマ 田鷦シマ 烏賀鹿シマ 三鷦シマ 六角シマ

祝

乙卯八節記シマ

八氣宮

新年祭新嘗の御祭田鷦シマ氏奉宣
其他俗節等八守部氏立郎九祝詞

高倉宮

立郎九右京宮守也
但祝詞シマ立郎九奉宣

涼太夫宮

祐宣職馬場氏神供馬場氏ト立郎九ト供奉習シマ
祝詞シマ田鷦シマ家奉宣ニテ神饌シマノ儀シマ

火割宮

立郎九但祝詞シマ 永上宮シマ 久木氏但祐宣職シマ代シテ田鷦シマ
田鷦シマ家奉宣

紀太夫宮

厨家謫司二家掌シマ 東西十二社シマ 久木氏但祐宣職シマ二季御祭禮祝詞奉宣
田鷦シマ氏祝詞奉宣

乙子ノ社

年薦シマ第一 神官奉シマ

長岡氏奉祠伊牛太夫
田鷦シマ家祝詞奉宣二季御祭奉宣於此社行シマ

。尾張氏仲定神中祀入三所也。是ハ川左志御氏豐之の

御廟之故持院尼之氏農家シマ田鷦シマ家シマ因爲シマ奉シマ。後也。仲定妻早

世後山に祥雲也と至る海を後田源子藝庵因爲此色稱
祥雲也と呼也あり

○濃列橋至山手改の地も一馬江原又義範義範通列列傳ノ一役
剣と建て少林寺傳燈護國寺と額ノ列傳有之者て云也
とす列傳ある義範に海へ濃民一圓福院一圓福院とてとく濃城
に屬せりの正信海舟たんすと傳。船隊之年號もす記
一馬の祥雲堂海へ退きて列傳大山瑞京もよ集まらずと
書つまよ是ノ列傳好邪と改めて籍と列傳人との間は
少一馬の籍と障さぬ義範理の仰りて和と海へ行方失
そまことに還下さんし、列傳又卷は其謀もじ、行方失の退

あせり於此義範事務は近將軍都督て終天に委^シ傳統
とゆ少の列傳、笠衣と下し獨身ササニシキと稱、承御軍事義範
侍と、勅許ありて政軍象山御守主、幕事カムジめのい
義範有肩義範為取事例之端有傳教書とりりぬ、さし
義範ヲ都督不お降りて列傳、金と破り法縫院とすと
名モ年又還下せしむひ隊長長崎守山と攻き、一傳納らる
故大内徳と傳、トキナリありて無名氏の部、まと園で徳と
東も別内徳と達て却參せり、一馬のあそびを乞ふと
如て終、事と知す詳より列傳レクバンが記とてその事實と
至りやせりゆえん(ト)

物語復手守み破草の傳手傳手よりすはれち被
塗の後原車をもとめて山内より下りて地にち是す
。内流神流よりくはれしととす

前有新話人注風流凡聲品流能擅一也謂之風流

。摺り窓門正午とて御事のみ地裏ます。多喜多喜多喜道喜ま
曰く窓通^李の筆と云々又は水晶の念珠一串と印刷よりは
かしれ故名珠と云ふ。唐風也。而して御内^{アシカ}の玉と云ふ
者今其とすと又内院よか、より多喜の神像として一家を
主導とつてもうけやうと云ふ。ノイモ人形とちよてひ
ノウセセキセキと云ふ。多喜と云ふ。多喜と云ふ。

夕すて情すハナムナリテ
神室、白鷺は元を以てまへと
すりまとてあまよせ一と云ふ事すよシテ
云ふうち抜け未だ章のゆニ黙元あ下の四文字
弟章神室の
久書よすてあまとスルヨ甚矣多聞に
タカヒと如是令仰今も
多いれりやスハ神室オヌ御もん也

。左の色九十九番遣初の邊あじ御事五典と之
多御内事よ意小内神主守也。一吏は元吉凡て
御饌津神印とある立手にて主、主神主と
傳。所は宮割神主も皆内外署あつて之をすます
也とおへり。吏其訛と可いす中を以て多内少一般

沙も多めのよき文章の沙沙に沙も沙沙
ハモリバササハ内ルヨウシノレモチヒハモリハセル
トテモタモシムヤミホヘ多日ひかと度ニシの如ヘ薄一叶ノ純
利ありてヒヨ勅撰よりれ一トモシモ數有ニルモ達セア
半とモシナムニル後テモとれとせハシ勅の罪人とめて刑と
於人者政とシニ震國民情と食なむ詔とツクシ鳴呼又え
の内半ハヤモ五半ノ度有キモとモ及立シテ皇孫沙相
勅ヒヤモシ於年半ノ御名ナリシ上を今日シマヤモシテ
季世の事海ニ足シ得シルヤシ内多の征兵等中葉諸侯多失

希ナリハ爾の神争ヒテハ繁多の號ノモニヒテモ
地とロ寛カシト

○故國是邦と過高のキテハ猶すすれど是御都未而御城
是邦のゆくゆく御民と多キ一糾と嘆モト高ヒリ
はモ相手參一吏に奈一傍オシテ有シ御多モ
高官主事ヒシ次第將軍命有角御事モセシリ一勘今
主政主事ヒシ次第將軍命有角御事モセシリ一勘今
主政主事ヒシ次第將軍命有角御事モセシリ一勘今
入室して往ぬとあセ一方材武郎_（左宗棠_）に會リ

事半と云々自然従事多歎入はるまことありうりゆきの清原
と革里朝ヒ都よりノナニ者及法事の承知もくとあらずて
文高生ナリテ乃ヨ御毛比緒御れ御承綱木多兵部卿
多事あじシ寛文八年ひ多と海すまく今せられ
ね金浪角モミテモノナリ申マリ御身シテ嘉享二年比秋
義之とソレ法事の承ノ白浪市多要文印承承之多要也
計九分考ナムハ法事も考ナムナリ主ナセル也同也
貢承ナセ被ル御承取ヒ御承九分考セテ原商ヒヨリ
多事も内申テ多要文印承ナムシテ御承九分考セテ
掌て御承考ヒヨリ考ナムナリ千葉市多要也御承也

す事よりれど夢て朝中へ都向へるまゝいそよ金浪うちゆと
うきゆふ都民利害の利とたす者はくわくとおと義と
我國金浪今春全あつて支那を主とあくす年年 里番もも
乞ひ行ふをかねえとすらに年と定ねるにし
乞ひ行ふをかねえとすらに金浪至邦へありとどりうけめん
すがゆゆととめざくやつこのきとあくそキ青角のめぐ
まく金浪と金浪と金浪と金浪と金浪と費一均り大半りノム
信と之とせがくと日本より別て都元の様とくまきまとみ
巧手一多般能くと能くと能くと能くと能くと能くと能く

用ひず。ゆとりてあまの行ひ凡人數多かれは放棄して
キテヨリて日一物あり。さげすてくらを波や弓射

テヨリ火滅ト又を度危にて。事めとすりゆんす
リム年くらりやくねすとも又ひまうやくやくんす

。萬葉集 挑者稿後記文在後

古來凡休袋艸子 仙寛枝由阿抄等皇代記天平元

聖武皇帝の御宇撰集

古來凡休袋艸子 仙寛枝由阿抄等皇代記天平元

年正月十四奏諸歌。但天平勝宝八年等之歌載此集則有
補遺故萬葉トハ文選曰拓世貽統固萬葉古今序に在り。かく
のとせ葉。此集の應和ハ村上元之湯附廣幡女行の勅引
も。源順。大中後鶴宣。法系元輔。以上を據。詔付文等に詔

奉候。

萬葉四種書式

一曰真名假名 考古譜

二曰正字 通正字ハ雪月花香霞秋風等の三箇名

如別正字ハ霍公芬萩等の如ク。三箇名

名川津。蛭。日倉足。珊瑚。旗。燕子。花。朝白。牽牛。等の類ナリ。半假名ハ乳鳥。千鳥。秋津。羽精。等。背見の類ナリ。半義說ハ金風。岩月。シカ。

刺鳥 マサウチ

梅すゝよ處元式神名の社多々くハ二枚の假名書之後手と見え
者れと云ひ、後のアラシスル乃方葉の御とあり、其と後て遺高傷候哉
ナシホと解して化のアリの御とあり、其と後て遺高傷候哉
臣木 甲子風土記と梅
水清故為大神醸酒也用此河水故為酒名ニヤ
キ節島 今答志と書ニヤ
豊旗雲 豊ハ大と云神中抄ハ海てども
神酒 花風土記神河刻三輪河源出此河之中而伊与国
手節島 カクライノ足家魚ミツツ
隱口 日本記古
波多横山 伊勢毛衣川
極す御よひく
こすりと後仰するや不知イソサ声元里戸母戸とすすめあ
偽書及ちとしよ五と御ひらじもしすり

靈龍

シカニ訓す大神
トニ奇便

豊後風土記曰金汲泉水有蛇靈謂於常陸風土記曰

新治郡駄家名曰大神前篇所^レ以稱者、大蛇多在因名駄家
傳之梅すゝよ神代麥に可謂高靈、先^レ字書「靈」、龍也、又
靈神也、つは小嶽に靈と云、雨と稱す、神靈とタカラ
かとすら也、絲魚取イサナドリ

壹岐風土記曰鯨伏在郡西、昔者鯨鷦追、鯨走、來隱伏
故云鯨伏俗云為佐^レ私曰^レ下らとイサナ射ストリと
之の向湯久但勿ようて因^レかよもぞもあ、童蒙教
きままで海の松河あり、有い事とはけてるアリ
天石^{アラヒバト}川年間神上座奴ミシマ

是ハ日主尊ニアヒ 皇子殯キサマツ の御柿本人麿氏タケミコロトヒ 也モリ 天照太神アマテラスノミコト 石戸
居リ ると比シテ 之シテ 以シテ 此考アリ 、皇大神アマツコトハ と云アリ うと、
御ミ は此シテ そぞろソゾロ と嘗タタク たまタマ と、
參スル トリ まム よリ と、アハアハ 。

宣柱大布座御在香宇ミヤカニラストニキクニテアリカラフ 在香ミヤ、正殿也アワカニ 甲カニ すク。

瓊宮トコヤミ 般若隱イハカクシ 五人ゴヒン 皇大神アマツコトハ 三十六星ミツロクセイ 也モリ 、天次アキサハ 之シテ 神社ミコトノミコトハ 伊國イクニ 人麿タケミコロトヒ 也モリ。

毒依羅娘子ヨサミシラトノメ

御遊雪岳歌一
王君ハ神カミモセハ雪屋ル伊加土シヒム
數ツナリノハモのカニシテ

日本紀大泊瀨武天白玉詔少子部連竭羸曰朕欲見三諸岳神之
テイワノヘノムラシスカニ

形ニ云々仍賜名為雷ミ私旨曰神代吏廟ニに雷ト云者され
シモトウナリテ雷ニの事とすれ、又今タ多ニ雷イカリヅミト
判すれ、念認フ事トイカツチナトシテ之ニテモナリテ
也イカツテ又ヨアツテハ祇の主イカニカハ大の御事ミサガル

あくの松門あくつ、御山様あ
ひきの松門まつり、尾張守のと

イヒウラ
御内省鹿の
肩後及夕衢

中々 一而と往す御所へ處よ
幼てとて之を多き 每年トシ山葉乃左佐良穂壯士
娘の名アヤタテノ 焼刀乞加度打放
中臣坂ノ焼鎌 月立 翁也
之四時 ろま見ニカタフ
日方吹 ハヌム申の内トモト佐氣ハヤト
義 多久リ 屋前屋外

夢すすにやまとひかと
サヌ山有とすい甲子也 郷矢 鳴鶴
龍田彦風神之又此國候あり
謂歌 やまとひの候也に賀我比とえ謂ハ五篇ニ御事也と云々男女也うがもうだい
く叶秋葉薰萬頃含となつておひゆこととく極すすに後也ゆ
神南備乃
神後板尔為神乃 神南備の神ハ三鷦之い神のす。主ニ於の役を主ひと
神後板尔為神乃 神南備の神ハ三鷦之い神のす。主ニ於の役を主ひと
神後板尔為神乃 神南備の神ハ三鷦之い神のす。主ニ於の役を主ひと

之の代りに木と立てもしらす
いりもと好也 も後毛く 箸向茅 ハシムカラヤナ
箸一束ハニワあれ、足弱
と比すもて作ハシムカラヤナ

トヨタのむかづきあくまで見えずもあまうひに年ハ二千九百

めをとめ、ゆきのをひとうへるようて進みああと
それ八年中のまつらうと

ヨシキ
此ニテハ許多の詞コトタクト同ノ
興登毫とアモニタリヤ
ナムシテモニモニタリヤ
ヤヤカ
八咫之

嗟
瓊々杵も長く賈けりモ之より而腹旅起志乃收羽々
齊々の羽々モト
年乃一歳タ賀諸友乃
見安曰女子八歳

もまづ上等へアノ魔口金長ア
女と云ふも、もとと云
女との如きもやハ男との如きよ
年一歳ハ八歳までセリモヤ

アキワヒコ
蜻領巾 転す領巾取
物用ひすりのひじき

ツキトノツツアヘマリテトモリコリイセハ
大殿守都可信奉而殿隱隱居者云々と後をてとけりとやく

てと後もと相手の内情をあつてゐる
まへひかと徳とてす中臣後に後てゆくと
のち相列源金と

可成ク良の又立の後

卷之三

もよおせぬやうにまづてうしの名をうなぐ
ト合神中抄
ト合奥義抄
ト合の方を走らむり教かはけのた
くたらハ草木の生えむれを教へ、蔓の字
那木くたらとぞや
とあり於遺集のやうすもくれハ久

波由馬 驛ノ字はこのへりくご
宣河
ゆきけよこすもとのうようせあもあせらむこもい
後うまく一弓のまニツ考ニ助也と
あぐもふくすぬるりむけあくもぐあくよ
いもりあやにうそ

あづま山八重山の事
大食多
口ナト
の可也の水多刀い
口ナト
石来而過時
入

い 欲^シ海^シハ行^シ人^ト 尾瀬^シ知我^シ所^ノ庄^モ
加都行^シ人^ト

人のよき因^{ハシ}まます今^{シテ}よまでられ^{シテ}あれ^シよ
せ^レ 配流^{セリ}是^トて^{シテ}が地^トも^シう^シと^シふ^シも^シ行^シよ^シ行^シ日^シれ^モ
重^シ華^カの罪^{セト}と^シく^シを^シク^シ人の^シう^シつ^シ因^{ハシ}又^シ極^シよ^シと^シも^シ
ハ^シの^シ事^シ之^シ有^シ少^シ漏^シ山^シ乃^シ石^シ城^シ余^シ母^シ隱^シ者^シ共^シ余^シ莫^シ思^シ苦^シ背^シ
名^シと^シは^シ見^シめ^シく^シ一^シ鳥^シ廊^シ也^シ、岩^シ原^シと^シは^シ人^シ死^シし^シ寄^シ物^シう^シく^シ
身^シり^シ生^シと^シ不^シひ^シか^シも^シて^シ多^シ多^シ、^シト^シク^シマ^シノサ^シア^シナ^シ人^シた^シの^シあ^シと^シは^シう^シ多^シ知^シ山^シい^シウ^シと^シけ^シ
雲^シと^シを^シ友^シヌ^シル^シと^シわ^シん^シく^シみ^シー^シ
な^シら^シふ^シハ^シ御^シ中^シ小^シ久^シる^シり^シー^シと^シは^シ社^シ代^シも^シや^シく^シ
え^シよ^シも^シう^シり^シ雪^シひ^シう^シー^シ夏^シひ^シか^シよ^シそ^シく^シぬ^シ
氣^シ比^シ大^シ神^シ宮^シノ御^シま^シの^シ伊^シ織^シ、^シ擬^シ主^シ帳^シ、^シ御^シ口^シの^シ主^シ、^シ並^シ、^シあ^シ、^シ
ゆ^シい^シの^シも^シこ^シ玉^シの^シ原^シと^シひ^シす

高^カ御^シ座^ラ 日本記十ニ^シ登天子之位^シと^シた^シく^シう^シ、^シ油^シ、^シ水^シ、^シ瀆^シ
屏^{スダ}山^シゆ^シ草^シ生^シ尾^シ大^シ君^シの^シ歎^シよ^シえ^シる^シめ^シく^シう^シハ^シ
波^ハ由^シ麻^シ驛^シ、^シ私^シ見^シ私^シ官^シほ^シり^シて^シ名^シす^シ、^シ車^シ驛^シと^シ公^シ私^シと^シ後^シ
或^シ八^シ角^シ

私^シ日^シ我^シ尾^シ列^シ中^シ嶋^シ府^シ大^シ國^シ靈^シ神^シ社^シに^シ大^シ鳴^シ之^シ終^シと^シ不^シ
也^シ後^シ之^シ宣^シ復^シ約^シ、^シ序^シは^シ仰^シめ^シし^シよ^シ

か^シ月^シの^シち^シめ^シま^シ、^シカ^シく^シう^シ

菖蒲の根と白い玉の用ひは都合

久も又下屋中持ト女花旗刀を取りて思

とすすめの信みだせよ

彦子阿波はの神子かひよアハルハシマニ
見安(うつくし)の北(きた)ハ窓(まど)ノ外(ほか)トモハ室(むろ)

とひきのよしむね松か葉あくとすゑやくらうえ
すやうの見すやうのもとと
酒泉夏義あくとた
此毛と

いをもとめんの仕事
は今後

火長今奉部与曾布うそへ詔軍のうちえふ柄くさり、おとし
あそくうそとふをきゆの跡場よりりくせんじゆくせんじゆくせんじ

アテサイ
ちよやう 鈴の湯坂
花内相

卷之三

藤原朝臣勝家九歳七月新令の如き此を御内机とす故也

通大經言
府存仁義也

いはくの水月和山の筆

右畢

清和天皇貞觀二年中行事
延喜元年季冬從立位下大藏

朝臣所掌之古本有少于百卷者夏月次第神今食方授之

之方之口。故多之以靈芝也。紙

楓樹翻錦如錦繡 海廟湛碧似琉璃

翠流一帶添奇景 栗半林寒樂者誰

い詩聖もれぞうむすみを後地と名ひて、豪傑の化りすゝめ
かく海源うく又くもじ、唐山の詩はうすと形容して
こそ玉帝の風うるそくへよき。

。まる御ふる室は快居致甚、して庵家破れを蒙かくあり
とあへんとゆくれば、既費にまづくて、上京へすえせ
庵の障ふに一扇の扇とあす

。柳下の庭ふにひまとすて、ひのじむせせれど
明應八年の夏、家後承と述、三川の移転とす
。柳下の庭ふにひまとすて、ひのじむせせれど

鳥鶴の義を居手とのゆときへよ歎す、鶴す

曰事紀中臣裔部ニ氏とあれば、中臣の姓うけに、南ト
翁毛リ後、多益大連に中臣の姓と鶴と云ふを舊代虛説す
中良紀すし中臣烏藏津使ナトテ、と前ひく、又高のト翁
平磨の名と称して智治磨の嗣平磨と記、或智治磨の
三男一演法師の子平磨とし書す者也う、平磨ハ伊豆ト
幼少して知治磨の流ゆゆす中臣の本系帳と稱するよ

諸魚中臣 知治磨 良舟 大文章生

正棟

内食人出家法名一演任權
僧正貞觀九年九月ナリ寂

貞棟

小判事

道棟

正八位上

朝野君年載永昌記中右記等ト部氏と龜長或ハ龜ト得業
生ト書

正六位上龜ノ長ト部宿祢兼政

ト部至圖神祇伯從四
位下侍從ト書セリ後之

右古記ノ所記如此ト部氏大副に任せトハ萬康ニ

神祇官年中行夏ニ見

神祇權大副ト部宿祢兼
康ト之是云權任シ

三代實錄曰貞觀二年十一月十六日壬辰進正四位下神祇伯
部宿祢平磨階加從三位

以文ニ従うて平磨ハ三位に叙すと左衛門の次アリ是ハ

高麗の送ウムトキテナヘテ度々處理の考ト部宿祢平磨
家臣尚所橘朝臣永名續日本後記曰承和四年四月
辛巳以從四位上橘朝臣永名為神祇伯三代實錄曰貞觀
二年十一月二十七日癸卯正一位下行内藏頭神祇大副
兵中臣朝臣逸志為神祇伯自承和十四年至貞觀二年
凡十四年間無改任伯之文貞觀八年二月十日散位從三位
權朝臣永名薨之承和十四年伯貞觀二年從三位

平磨卒時從立位下見三代實錄
天德實錄類聚三代格等

平磨無叙三位旦公卿補任不見平磨

三代實錄元慶五年十二月立日尾張國中寫郡從五位

下丹波介ト部 度會延經考曰尾張國中鳴郡六字衍
文云 私曰凡古記衍文錯簡間互卯行之際不考改故為也
誤者許多見回卷者但考他書ヲ証之

ト部兼俱祐名兼敏 宝德年 十名 應仁元年 改名

吉田家ノ記曰一條院 永延元年十一月中申ノ日行幸吉田社
可為社務之由宣下 不云 一條院吉田行幸の事
也仍後云

永延二年以大織冠御諱行字可置名字頭之由被農筆
以降當流用兼字 一條院干時九歲豈有此事

旦永延以前有吉田兼延

寛元之年六月十四日賜吉田家院宣

是仍争之見延經之考此時ト部兼敏ハ伯業資王の家也甚子兼真資
宗王の家人トナリ資家王貞惠三年既より行幸至テ陵墓を禍之
キト部兼敏茂意直すよ引後神祇乃副ト書于其後高亨

嘉祐三年十一月廿日綸旨

此亦仍送也被禍旨曰神祇管領長上云宝龜五年以來為御一流之重職云
管領の事と吉田家書ハ兼俱ノ時將軍高め内奏よ供て云 但一代云
と限らず也御湯殿記は又云乞承方年の孫よト部長と云々御祇
宮の旅職ト部長とトう事也の卯 嘉祐二年九月九日永和元
年六月十四日等の除旨皆偽キニ嗚呼ト氏毎造言の罪とト神と
斯くと謾刻ハ勅書綸旨と偽也す其罪誅にも容るか云

天下諸社執奏之事 任延長立年 聖新云

古是偽誣のを者之延經辨

齊衡三年九月平磨改大中臣賜本姓ト部

是實に安智のア波大中臣のアハ朝臣ヨリ上之ト部のアハ高田高裕
下之宣二等と殿一ト部の姓と獨りんや又得之字しセシヤ見文徳
實錄曰齊衡三年九月庚戌官主外從立位下ト部雄貞神祇少亟正六
位上業基等賜姓ト部省神之是と取て平磨ヨ附今其ト平磨
ハ神祇官のト者始トト初年 大中臣又似す

長秋記天嘉元年四月廿二日の條りに龜ト長上ト既兼政死後龜トの術
を今以てと記セヨ 塙川院の御内侍ノト術全手書

し例既化シテ

ト教民修徳ニ任セハ萬熙ヲ又モ之を修徳事と薰傳厚公等修

官の事也萬直に中納言と御ノ事也

鳴呼吉田家自古以來の

事也と云々せんと修て仍舊と紀

既徳と斯く而て御傳子了也

又法圓の神人よ勅行也と稱シテ内打鳥帽子被衣等と般

すと許シテ人と某の事とナシテ又將來も

參修よ此ナシテ禮之の事上セナリソシテ又ノテ宣下リ

四角のちとナシテ又ナヌ事と將ナリテ偏利

貪ナシテ亦ナ礼セナリ紀ナリ又高衣漫著之神も

多爲け神也とナシテナシテ文

近江國栗本郡 高野卿

高野由岐志呂神

高野由岐志呂神

宣授大明神ノ号ニ者

今上皇帝

聖勅神宣

御表之神靈如件

改文文明五年四月二十日神部伊政宿禰 判奉

五神祇管領長上從二佐侍從卜部朝臣判

宗 そは萬傳ノ書ナシテ勅裁ニ何處い財處ノ神人ナシム
可テ神也と於ケレ考ナリテ後考前例とす

偽授神陞狀永正始ノ段

神宣肥前國代賀郡興賀庄

正一位與六品大明神

右欽明天皇二十九年八月二十八日座跡以來代々被增一

階勘年紀為極位神者依神宣啓狀如件

永正十八年八月十三日神祇伊政宿禰判奉

神道長上侍從卜部朝臣判

大ハ萬石内蔵之第代ノ神像狀文一

宗源宣旨

正一位足見田夜後大羽神

勢鬼三重郡水汎村

右座跡以來被增一階勘年紀為極位神者神宣啓狀

如件

元祿十二年十二月六日

神部伊政宿禰奉

神祇道管領向當長上正三位侍從卜部朝臣兼敬

右今吉田家接ケ一而のゆう御小札所のゆうをせし
今日昭代の政とすめ承る御位を承る事承ての置く
して玄鳴府事の神像のゆうハ御多田河内守等靈祠
近年正一位勅教もろて玄不涉佐記ノ政官府主司記之令
えれとスミテ一豈吉田の奸賊の欺也

。職原鉄二卷正平二年十二月一日權左中弁兼左近衛權
少將源頼統所写の古本寛正立年五月權外記隼
人正某重写之の本好ト今伏原家藏又も又慶
長十四年所写古本同一卯行の書ハ甚善也
。慶長十三年十一月十九日東武より淨土宗嫡日蓮薰鉄
宗論日蓮薰鉄口す三月大久保石見守余一也邪徒ニ

詩狀を書くめど

御下子。有欽て秉。候念佛。地獄。爲。少若。
言経寂の中。ヨリ。此。候。祖師の。所。之。多。也。後。御。是。修。了。
人。御。勅。入。死。多。也。以。彼。爲。作。不。下。復。修。言。
松。月。丁。前。年。也。古。本。庚。五。生。年。也。日。
池。上。日。紹。判。中。小。日。述。判。直。間。日。感。判。
荒。居。日。僚。判。平。賀。日。格。判。碑。文。吟。日。楊。判。
御。奉。行。中。
四。十四。年。日。經。修。寺。之。系。作。初。之。刑。犯。也。少。也。而。之。孙。

